

「鳳だんじり祭り」の概要と課題

——伝統的祭礼の近代化と地域組織の変容——

人間社会学科 野中 亮

抄録：本稿の目的は、堺市鳳地区のだんじり祭りに関するデータベースを作成し、今後の同地域・祭礼研究の礎とすることである。祭礼を通じた地域構造の解明を課題として研究に着手したが、初年度の調査でこの地域と祭に関する先行研究が皆無であるばかりか、基本的なドキュメントデータすらもほとんど存在しないことが判明した。したがって、今後研究を進めて行くための基点の作成を目的に、聞き取りと観察を中心に同祭礼・地区の概要をまとめたのが本稿である。

祭礼の詳細や運営、地区の特性などを項目ごとに整理したが、紙数の問題もあり、インデックスを網羅的にすることを重視して各項目の記述は最低限のものにおさえてある。また、最後に現段階での研究の方針をまとめている。岸和田だんじり祭りの影響を受けて変化しつつある祭礼と、いまだ未分化な状態にある祭礼組織と自治会組織の問題の2点が今後の研究課題となるだろう。

キーワード：だんじり、祭、鳳、祭礼組織、自治会

1. 本稿の目的

2004年と2005年に実施した堺市鳳だんじり祭の調査の概要をまとめ、今後の研究に資するための基礎資料を作成すること、また、これまでの調査で見えてきた課題を示し、今後の調査研究の方向性を定めることが本稿のねらいである。

岸和田のだんじり祭は全国的な知名度も高く、少なくとも近畿圏でその名を知らない人はおそらくいないだろう。しかし、この岸和田だんじり祭でさえ社会学的なフィールド調査が行なわれた形跡がなく、鳳だんじりにいたっては、若干の郷土史研究をのぞけば、体系的な研究は社会学以外の学問分野でもほとんど存在していない。鳳だんじり祭の運営組織のユニークさとその変化の兆しに惹かれて開始した調査であったが、祭の概要をまとめておくことが先決と考え、社会学的な鳳だんじり研究の基礎資料を作成することとした。

したがって、本稿ではこれまでの調査で知り得た鳳だんじり祭の全体像のラフスケッチが主眼と

なっており、具体的なテーマを追求する事は次の機会に譲りたい。紙幅の問題もあり、かなりダイジェストせざるをえなかったが、それでもこの祭と地域のあらましは明確になったはずである。

なお、本稿でもちいているデータは、学生たちの協力なしでは今もって収集・整理できなかったかもしれないものばかりである。その意味で、本稿は学生たちの協力や旺盛な学習意欲に多くを負っていることを強調しておきたい。

2. 調査の概要

本稿では2004年4月から2005年10月までの調査期間中に得られたデータを使用している。2004年度は野中が大阪樟蔭女子大学学内特別研究助成を受け、若干の学生協力者を得て実施、2005年度は大阪樟蔭女子大学人間科学部人間社会学科の社会調査実習（共同担当者：竹村一夫・呉知恩）として実施した調査である。ドキュメント調査をもとに課題を設定し、インタビューと観

察をメインにフィールドワークを行なった。なお、2005年度の調査実習は龍谷大学社会学部の調査実習（担当者：吉田竜司）との合同調査となっており、調査データは双方で管理、利用することになっている。

調査のスケジュール⁽¹⁾

① 2004年7月24：夜市

鳳本通商店街で開かれる夜市の調査。青年団が地域活動の一環として夜店をだしており、その家族も含めて簡単なインタビューと観察を実施。また、北王子地区の地車小屋^{だんじり}⁽²⁾が開放されており、お囃子を演奏していたため、写真撮影や録音をすることができた。

② 2004年9月19日：試験曳き

「試験曳き」と呼ばれる本祭前のリハーサルを観察。本来は曳行コースの確認や調整用の試走などが目的であるが、前夜祭的な雰囲気もあるため、関係者と観客へのインタビューを実施。あわせて本祭調査の観察ポイントの確認などをおこなった。

③ 2004年10月8～10日：本祭

12名の調査協力者を2、3名1組とし、定点観測とインタビューを実施。デジタルカメラ4台、ビデオカメラ2台を用意し、それぞれの半数を蔵王前に固定。残りは大鳥神社前、上交差点間を往復し、定時定点観測をおこなった。日曜日のパレード時には人員を区役所前に集中させている。また、それらの間に関係者や観客にインタビューを実施した。

④ 2005年6月10：予備調査

堺市西図書館での資料収集。だんじり曳行コースを実際に歩き、調査実習受講学生に土地勘をつけさせることも目的のひとつ。

⑤ 2005年8月9日：連合自治会インタビュー

連合自治会長3名、堺市西区役所自治推進課職員1名へのインタビュー。鳳だんじり祭の概要や、地域特性、各地区の責任者についての情報を収集するとともに、8月のインタビュー調査、10月の本祭調査への協力を依頼。

⑥ 2005年8月20～23日：インタビュー調査

学部学生・院生・教員あわせて19名で実施。8月9日の調査で紹介してもらった自治会長やだんじり組織のキーインフォーマントに依頼をかけ、全10地区のだんじり組織および自治会の役職者や鳳のだんじりに詳しいお年寄りなどをピックアップして計107名にインタビューを実施。

⑦ 2005年10月7～9日：本祭

のべ20名の調査協力者を2名1組とし、定点観測とインタビューを実施。デジタルカメラとレンズ付きフィルムを各班に持たせ、3班を要所に固定、残りは曳航コースを巡回して適宜関係者や観客へのインタビューと写真撮影をおこなった。定点観測ポイントにはビデオカメラを固定で用意し、カメラとあわせて20分おきに周囲の様子を撮影、あわせて記録用シートに観客の流れや警備・交通状況、だんじり曳航の様子などを記録している。

3. 調査地の概要

堺市は、大阪市に南面するベッドタウンで、人口830,982人（06年8月現在）の政令指定都市である。古くから商人の町として第三次産業が盛んであるが、大阪市に南面しており、JRや南海の鉄道路線、高速道路や幹線道路等の交通基盤の整備が進んでいるため、大阪市のベッドタウンとしての性格もあわせ持っている。

鳳地区は堺市西区に属し、南西部が高石市と接

(1) イベントや複数での調査のみ記載。野中が単独で行った資料収集やインタビュー、ラポール形成のための会合参加などは煩瑣であるので記載していない。また、インタビューや定点観測の記録シートなどは巻末に掲載。

(2) だんじりを保管してある小屋。各地区毎に設置され、公民館と隣接していることが多い。地区によっては敷地内への女性の出入りを禁止している。

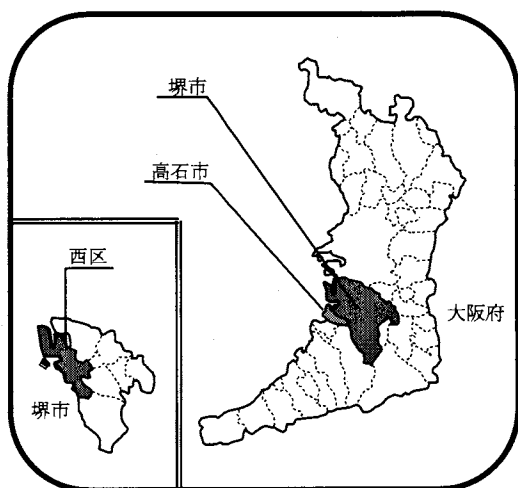


図1：堺市西区の位置

する位置にある。JR 阪和線と羽衣線が分岐する鳳駅を挟んで、国道 26 号線、大阪和泉泉南線（府道 30 号線）が南北に走っており、交通の便がよい。西区役所や市立西図書館などの公共施設の他、大型商業施設（ウイングスダイエー、以下「ウイングス」と表記）もあり、西区の中心的な区域である。

鳳だんじり祭は、鳳駅北側にある美波比神社（大鳥大社内）の秋期例大祭である。大鳥大社から上の交差点に抜ける道が旧街道筋（熊野街道・小栗街道）であり、現在は鳳駅東の交差点、通称「蔵王前（ZAO 前）」から南がアーケード「鳳本通商店街」となっている。この街道筋にあったのが旧大鳥村で、そのエリアに該当する大鳥、野田、

新在家、北王子、野代、長承寺の 6 地区には、現在でも「旧六カ村（あるいは単に「六カ村」）」という総称がもちいられている⁽³⁾。美波比神社の氏子であるのはこの「旧六カ村」であるが、「連合曳き」（4 節参照）の際には、上、石橋、富木、浜寺元町の近隣の 4 地区が曳行に加わる。これら 10 地区が鳳だんじり祭の参加地域である。これら旧村時代の地区名はそのまま各地区のだんじり組織名に使われており、また、今でも日常会話で普通に使われる地名でもある。現行の地図上にはそうした地名はなく、調査開始時には土地勘がないためかなり混乱させられた。現在の町名で置き換えてみると、やや複雑であるが、表 1 のようになる。これらは概略であり、かならずしも細部まで完全に一致しているわけではない。そもそも関係者への聞き取りでも、おおまかなところはわかるものの、細部になると曖昧な部分も多い。土地の区画自体が変わってしまっているのであるから仕方のないことであろう。この表は一応の目安と考えていただきたい。図 3 も参照のこと。

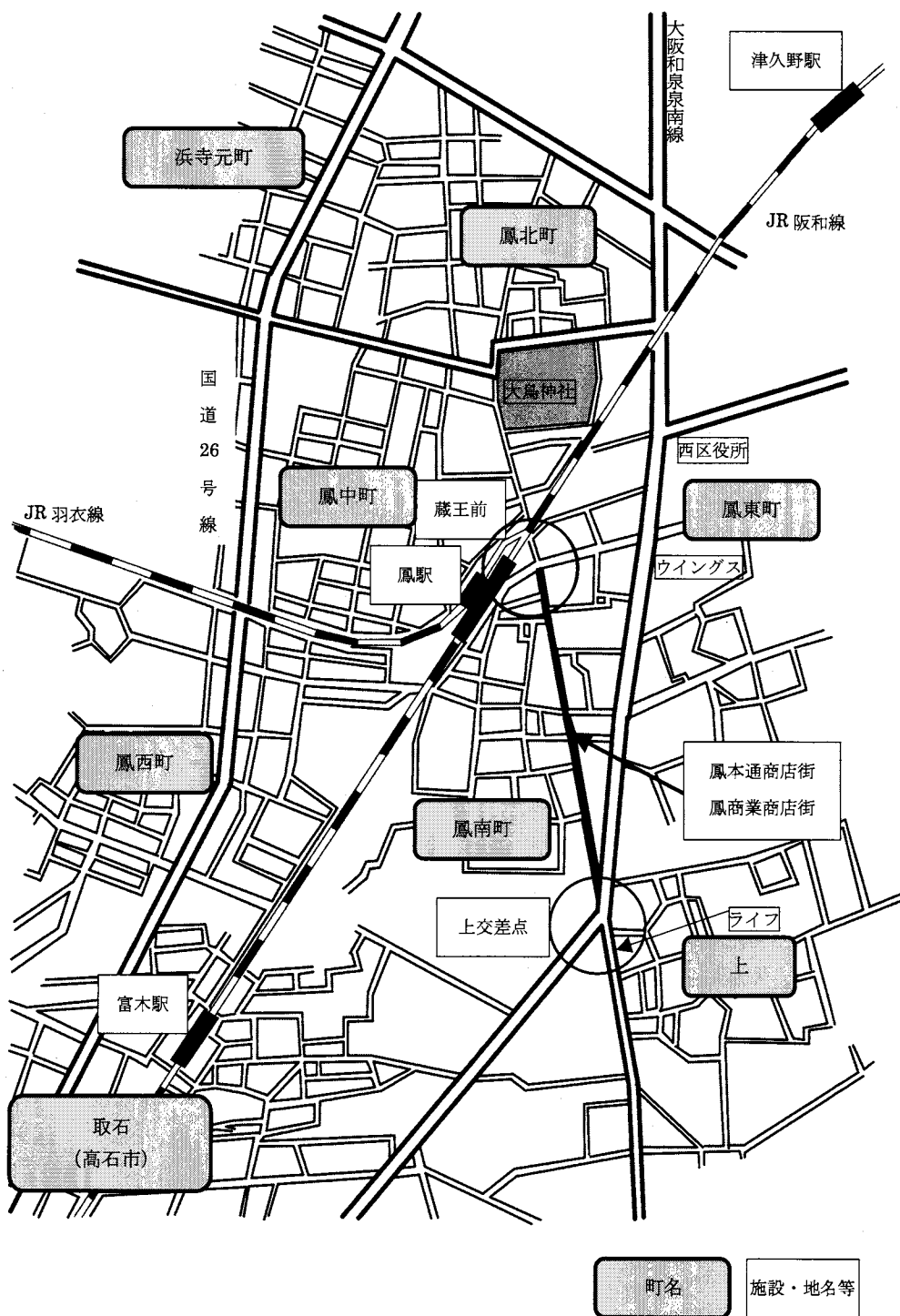
4. 鳳だんじり祭の概要

「鳳だんじり祭」とは美波比神社（大鳥大社内）の秋期例祭の通称である。日本の伝統的な秋祭と同様に五穀豊穡祈願を目的としたこの祭は、毎年 10 月の最初の週末に行われる（04 年は 10/8～10、05 年は 10/7～9）⁽⁴⁾。先に述べたように、「連合

(3) 「ムラナカ」という呼び方をすることもあるが、これは旧六カ村をさすこともあれば、自分が所属する地区をさすこともあるようである。個々の地域内を曳行することを「ムラナカ廻り」というが、これなどは後者の用法の例である。

(4) ただし、「二日（にいび）」と呼ばれる大鳥大社の地域行事がこの時期に重なっていた場合、祭は 1 週間延期される。04、05 年とも 10 月第 2 週の土日に開催されているのはそのためである。「二日」とは、毎月 2 のつく日に大鳥大社の境内で衣類や野菜などのマーケットを開催するものである。

美波比神社は 1906 年（明治 39 年）の勅令第 220 号「神社寺院仏堂合併跡地ノ譲渡ニ関スル件」に基づいた神社合祀政策の結果、旧六カ村の氏神が大鳥大社内合祀されたものであり、もとより氏子をもたない大社である大鳥神社にとってみれば、その祭は本来の神事ではない。とはいえ、だんじり祭は地域住民がかなりの熱をいれて心待ちにしている年に一度の例大祭であり、大社側がなぜ神事より月例地域行事を優先するのかは不明である。



* 国土地理院『堺 1/25,000』2000 年，昭文社『マッピング関西 大阪・神戸・京都』2006 年を参考に，野中が作成

図 2：鳳地区概略図

表1：各地区の現在町名との対応

旧村地区名	現所在地
大鳥	鳳北町 1～10 丁 鳳中町 1, 2, 5, 6, 7, 8, 10 丁
野田	鳳中町 3, 4, 5, 9 丁 鳳東町 1, 4, 5, 6, 7 丁
新在家	鳳西町 3 丁
北王子	鳳東町 1, 2, 3, 6, 7 丁 鳳西町 1 丁
野代	鳳西町 2 丁
長承寺	鳳南町 1～5 丁
上（かみ・かむら）	堺市上
石橋	堺市草部石橋地区
富木（とのぎ）	高石市取石 2～3 丁目
浜寺元町	堺市浜寺元町

* 堺市の町名には「丁」が用いられる。

曳き」(4 節参照) と呼ばれるだんじりの曳行には、旧村をもとにした、「六ヶ村」と呼ばれる大鳥・野田・新在家・北王子・長承寺・野代の 6 地区に加え、濱寺元町、上、石橋、富木の 4 地区も参加する。本来、浜寺元町は大鳥大社の境外摂社である大鳥北浜神社の、上・石橋は日部神社の、富木は等乃伎神社の氏子地区であるが、連合曳きの前には 10 地区そろって美波比神社でお祓いを受ける。

この祭でのだんじりの曳行行事は歴史的にもかなり古い部類に属し、だんじりそのものの芸術的評価も高く、「通好み」のだんじり祭だとされている。旧村地区を中心に曳行するが、堺市役所西支所前のコースでおこなわれるパレードと、狭いアーケードを走り抜けるコースが見せ場になっている。

(1) 変遷

鳳のだんじりについては参照できる先行研究や文献が皆無といってよい。歴史的資料も鳳について触れられているものはほとんどなく、だんじりに関しては堺全域レベルでの文献に頼らざるを得ない。以下の歴史に関する記述は、桧本多加三[桧本, 2000a, 2000b] の堺だんじりに関する記述に全面的に負っている。

堺のだんじり祭は、歴史的には岸和田より古いという説もあるが、詳細は不明である。ただ、江戸時代の記録に「堺だんじり」⁽⁵⁾ という言葉もあり、いわゆるだんじり祭が江戸時代にこの辺りから西日本全体に広まっていったことは確かなようである。江戸時代の堺は商人の町であり、文化と富の集積地でもあった。また、木工細工・建築が盛んな場所でもあり、そうした歴史的・文化的背景を考えれば十分に説得力をもつ見解である。

近代に入ると、新聞などに堺のだんじりに関する記事が散見されるようになる。明治 29 年には、堺市内でだんじりの曳行を巡って 2 名の死者をともし喧嘩が発生し、市内でのだんじり曳行が全面禁止になっている。その結果、堺のだんじりは旧泉北郡などごく一部の地域でのみ継続され、市内では「布団太鼓」が盛んになっていく。昭和 30 年代には合併によって市域が一気に拡大したが、それと前後して新市域でのだんじり曳行はなくなっていった。原因は、秋祭の母体である農村の崩壊である。岸和田と鳳商店街近辺の各地区では途切れることなく継続していたが、それは、この辺りのだんじりの担い手が商人だったためである。しかし、一部では継続していたものの、全市的にみればかなりの衰退だったことは事実で、「堺だんじり」の伝統が一旦途切れたかのような言い方がされることがあるのは、こうした事情のせいである。

一度は衰退してしまった「堺だんじり」だが、

(5) 西日本では、「かつぎだんじり」と呼ばれる神輿や布団太鼓等をさす事もある。

昭和 50 年頃には「新しい地域の象徴としての祭」という形で盛んになる。自治会館や地車小屋の建設、だんじり購入の費用は、地域で不要となった共同保有地の売却金をあてていた。われわれのインタビューでも、新在家や石橋では農業用の溜め池を売ってだんじりの費用を調達したという話が聞けた。また、この時期は日本全体で伝統的な祭が、農耕村落の神事から現代的な「まつり」へと変化していった時期でもある。堺のだんじり祭もその例にもれず、祭日を週末や 10 月 10 日の体育の日に合わせるなど「近代化」している⁽⁶⁾。桧本はこの時期の特徴として、だんじりの「新しい市民の祭」化をあげ、さらに新しい祭の岸和田志向を指摘している [2000b: 9]。

岸和田志向とは、「やりまわし」⁽⁷⁾の導入や、服装、かけ声といった曳行スタイルが、岸和田をモデルとしたものになっていたことを指している。しかもこの「岸和田志向」は、「新しい市民の祭」だけでなく、鳳のような伝統的なだんじりにも影響を与えているのである。この原因について、桧本はマスコミの影響の大きさを指摘し、「鳳（大鳥）だんじりも悪くはなかったが、岸和田には「お城」と「紀州街道」というロケーションまで備わっていたため、マスコミが取り上げるのにはうってつけの祭であった」[2000b: 8]と述べている。

(2) だんじりの型と特徴

「だんじり」「だんじり地車」とは、山車の一種であるが、とくに大阪を中心とした近畿圏ではだんじりを綱で引いて走って引き回すことが多い。

神社の祭礼で神事の一環として地域内を巡行するが、現在ではこれが祭の中心的なイベントとなっている。だんじりには様々な形のものがあるが、ここでは鳳で見られる 3 つの型を説明しておく。ただし、紙幅の都合もあるため、曳行スタイルに大きく関わる部分のみの説明とする。

「上地車（かみだんじり）」：野田・石橋地区（写真 1）

堺周辺の伝統的な地車の型である。鳳でも以前はこの上地車が一般的であった。基本的には御神輿を台座に乗せたような形で、下地車と比べると幅がせまく、重量も軽い。正面から見ると、台座に比べて屋根部分が大きく、「頭でっかち」な形であることがわかる。軽いのでスピードを出しやすいが、重心が高い位置にあるためバランスが悪く、「やりまわし」は難しい。軽さを生かしたスピードと急発進が見所で、スタートの際にだんじり前方を持ち上げた状態で一旦停止し、急発進する「ロケットスタート」は野田地区の名物でもある。

「下地車（しもだんじり）」：大鳥・北王子・長承寺・上・富木地区（写真 2）

泉州沿岸地域に伝統的にみられる「岸和田型」とも呼ばれる型である。上地車との違いは、屋根・台車の形や大きさなど多岐にわたるが、最大の特徴は大きさと重さである。下だんじりの場合、高さは 4m 近く、重さは 4t を超える。元々は 3t ほどの大きさであったものが、戦後、道路が舗装され曳行に力を要しなくなったこと、また、路上ですれ違うような曳き方をしなくなったため車幅をさほど気にせずによくなったことなどから、大型

(6) 岸和田市では、参加者の利便性の向上と観客数の落ち込み対策として、06 年度から「敬老の日」（9 月第 3 月曜）の前日（日曜日）と前々日（土曜日）に祭日を変更している。

(7) スピードを落とさずに急カーブをまがることをさす。だんじり曳行の見せ場の一つで、スピードを落とさずに一度のテコ（舵棒）操作で進行方向を変えることが重視される。しかし、綱とテコの息が合わないとカーブへの侵入角度がうまくコントロールできず、最悪の場合、転倒する場合さえある。3～4t もあるだんじりが人ごみのなかで転倒すれば大事故につながりかねない。実際、鳳でも転倒などでけが人が出たこともあるし、死亡事故の例もある。もっとも、危険と隣り合わせであることが魅力のひとつでもあるのだが。

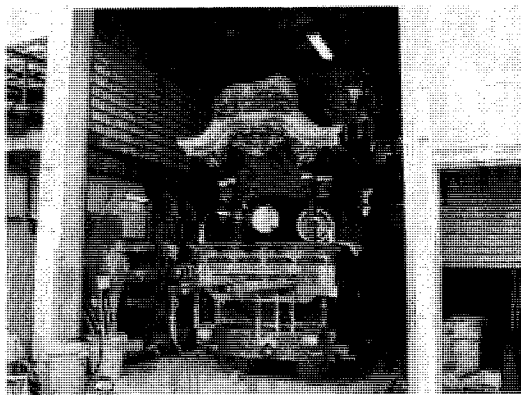


写真1：上だんじり（野田地区）



写真2：下だんじり（北王子地区）



写真3：折衷型だんじり（浜寺元町地区）

化してきたという経緯がある。正面から見ると台座部分が大きく、「鏡餅」のような形である。重いため、少人数で曳くのには向いていないが、重心の低い下地車は非常に安定しているため、「やりまわし」を重視する今の曳行スタイルに向いている。

「折衷型」：新在家・野代・浜寺元町地区（写真3）

下地車をベースに、装飾などに上地車の特徴をとりいれているのがこの型である。堺伝統の上地車はスピードは出るものの、「やりまわし」には向いていない。本来、「やりまわし」は岸和田型の下地車を前提とした曳行スタイルなのである。「やりまわし」等の「岸和田スタイル」が鳳だんじり祭にも取り入れられるようになると、地車新調・購入の際に、安定感のある下地車が求められるようになった。こうした要望に応えるかたちで導入されたのが「折衷型」である。上地車の伝統と下地車の操作性の「良いとこ取り」をするという設計思想の柔軟性もあわせて、現代的な型であるといってもよい。

鳳の場合、いずれの型であっても必ず発電機が積まれ、屋根を取り囲むように地区名が入った提灯をぶら下げる⁽⁸⁾。夜間に曳行するという鳳独自の曳行スタイルが照明を必要とするからである。夜の闇の中を疾走するだんじりに独特の迫力があるのはもちろんだが、50個を超える提灯を揺らめかせながら走る様子は幻想的ですらある。鳳のだんじりの魅力のひとつとして上げられる夜間曳行に提灯は欠かせない。（写真4）

また、雨のなかでも曳行するため、天候が思わしくないときには屋根にカバーが掛けられた状態で曳行されることもある。せっかくの飾りや提灯

(8) 基本は旧地区名だが、長承寺は「南町」、上は「鶏鳴」となっている。「南町」は町名であるが、「鶏鳴」は地車購入資金にまつわる話が元になっている。新しいだんじりの購入資金について寺の住職に相談したところ、「鶏が鳴く前から働いてお金をためなさい」と言われたことから命名したとされている。

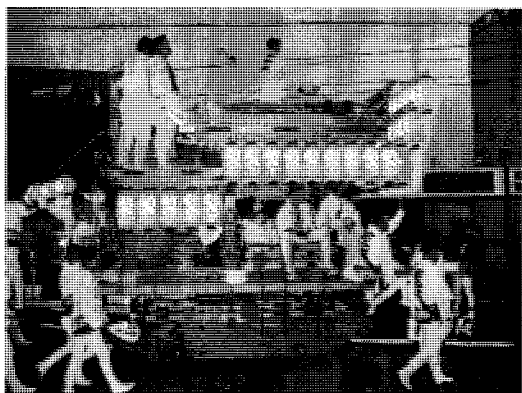


写真4：堤灯を装着しただんじり（新在家地区）

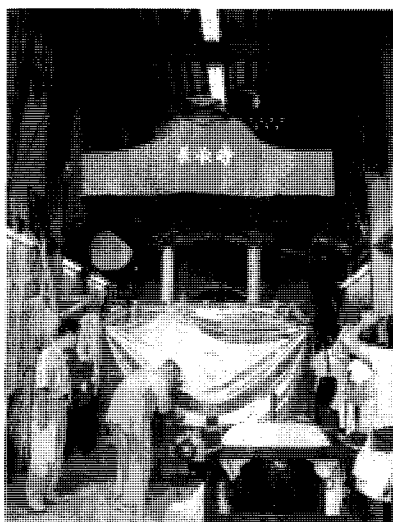


写真5：カバーを付けただんじり（長承寺地区）



写真6：地区会館とだんじり小屋（北王子地区）

が隠れてしまうが、木造である上、一面に繊細な彫り物が施されているのであるから、雨水はできるだけ避けなければならない。（写真5）

新調すれば億は下らないとされるだんじりである。当然、その保管と管理にもさまざまな手間や設備が必要となる。普段、だんじりは「^{だんじり}地車小屋」と呼ばれる専用の建物のなかに、さまざまな装備品や祭関連の道具類とともに収納してある。例えば、「コマ」と呼ばれる木の車輪は、専用のタンクの中に水を張り、その中に沈められている。乾燥して割れるのを防ぐためである。その他、テコなどの取り外しが可能な部品や綱など、だんじり曳行に必要な道具がすべて整理・保管されている。また、祭の準備等の際には青年団の集会所ともなる。この「^{だんじり}地車小屋」は地区の公民館等と隣接していることが多く、地区によっては敷地内女人禁制の場合もある。普段は祭の準備やメンテナンスなどをのぞいて正面の戸は閉じられているのであるが、青年団などが関与する地域行事の際に、中のだんじりが見えるように正面のシャッターが解放されるときもある。（写真6）

現在だんじり1台を新調すれば1億～2億円かかるという。例えば一番最近では富木が2002年（完成年度）に新調しているが、この時にも2億円近い金額になっている。新調ではなく、修理だけでも数百万から数千万円かかるといわれており、これにだんじり小屋や諸々の物品等を加えれば、だんじりの維持管理だけでも相当の資金が必要なのは想像に難くないだろう。祭に必要な費用はすべて「御花」と呼ばれる地域からの寄付でまかなわれているが、だんじりの新調や修理など、イレギュラーに大金が必要になった時には、その旨周知され、別に寄付が募られる。費用の大きさもさりながら、普段のメンテナンスなどだんじりに注がれる人的労力も大変なものである。しかもこれが数百年の間継続されているのであるから、地域の労力や財が、そしておそらく地域の「こころ」がすべてつぎ込まれるだんじりは、ただの祭

具,「モノ」の領域を超えたものだといってよい。

(3) 祭礼スケジュールと曳行コース

だんじりの曳行には、大別すると、「試験曳き」「自主曳行（ムラナカ廻り）」「連合曳き」の3種類がある⁽⁹⁾。「試験曳き」とは文字通り本番2週間程前に行なわれるリハーサルで、曳行コースやだんじり本体、曳き手のチェックを目的としたものである。とはいえ、本番と同じ装備・衣装でだんじりを小屋から曳き出して曳行するので、いわば「前夜祭」的な雰囲気もある行事である。

「自主曳行」「連合曳き」は本祭の際の曳行である。「自主曳行」ではそれぞれのだんじりが自分たちの地区を中心に曳行する。かなり狭い道でもくまなく回っているため、うっかりするとだんじ

り同士が離合できない道で鉢合わせすることもありうる。そのため、曳行責任者たちは事前にコースと時間を調整しており⁽¹⁰⁾、現場では携帯電話でお互いの位置を確認し、そうした事態に陥らないよう工夫がなされている。一方、「連合曳き」は10地区が連携して順番に一定のコースを曳航するもので、鳳だんじり祭の見せ場のひとつである。大鳥大社前（写真7）～蔵王前（写真8）～上交差点（写真9）間を往復するのが基本的なコースとなっている。日曜日の昼に大阪和泉南線を通行止めにして行なわれる、ウイングス前（写真10）のやりまわしが見どころの「パレード」（写真11）も連合曳きに含まれる。

祭礼期間の公式スケジュール（表2）と曳航コース（図3）は次の通りである。初日の日中は自主

表2：祭礼スケジュール（2005年度）

	1日目（宵宮）	2日目（宮入）	3日目（パレード）
午前	8:00 宮入（上・石橋・富木）	7:00 新在家・野代乗入れ 7:15 新在家・野代発 8:00 宮入 9:30 富出 10:30 富木乗入れ	8:00 各地区自主曳行
昼食（各地区本部）			
午後 （昼）	13:00 各地区自主曳行	12:30 連合曳き（南進）	12:30 連合曳き（南進） パレード
夕食（各地区本部）			
午後 （夜）	17:30 新在家・野代乗入れ 18:00 新在家・野代発 連合曳き 21:00 完全納車	18:00 連合曳き（北進） 22:00 完全納車	17:30 連合曳き（南進） 22:00 完全納車

(9) これら正規の曳行の他に、警察の許可を受けずに曳くこともある。酒に酔った勢いなどで曳いてしまう場合であるが、これを若年層は「闇曳き」、高齢層は「盗人（ぬすっと）曳き」などと呼んでいる。

(10) 各地区ごとに、曳行コースと5～10分刻みのタイムスケジュールが載った曳行予定表が用意される。

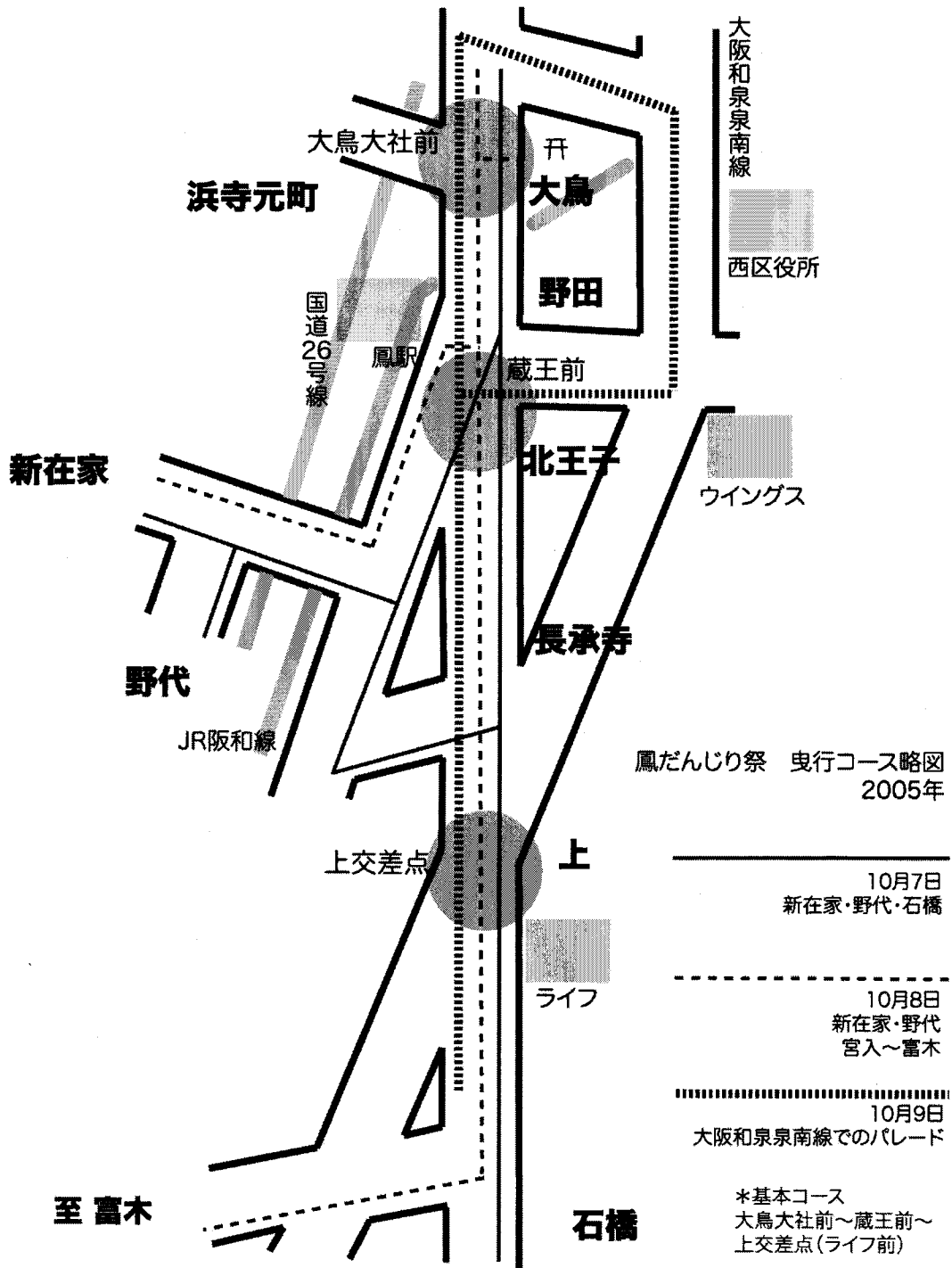


図3：曳行コース概略図



写真7：大鳥大社前



写真8：蔵王前



写真9：上交差点



写真10：ウイングス前



写真11：宮入

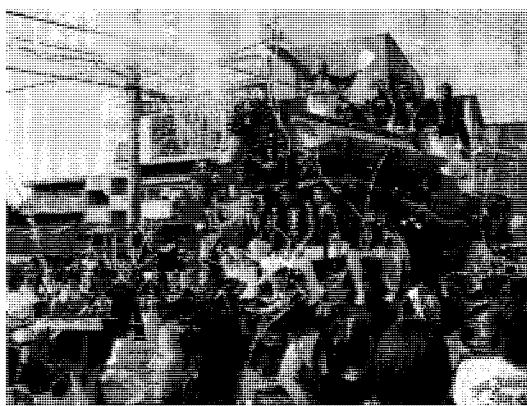


写真12：パレード

曳行がメインで、夕方からの連合曳きは大鳥大社～上交差点の基本ルートに加え、新在家・野代・石橋まで曳航する。

二日目は、午前中に10地区揃っての「宮入」と呼ばれる神事が行われる。なお、2004年は台風の影響で宮入が中止となっている。2005年度は、富木乗り入れが連合曳きに追加されており、その後、基本コースの連合曳きをおこなっている。

三日目は、午前中は自主曳行、午後は「パレード」と基本コースの連合曳きである。「パレード」は午後1時から大阪和泉南線を一時通行止めにしておこなう大がかりなものである。堺市長らを来賓に迎え、歩道はウイングス前でのやりまわしを見ようとする観客であふれかえる。3日間のうち、もっとも観客が集中する時間帯である。その後、時間いっぱいまで基本コースを連合曳きし、最後に納車（「小屋入れ」）となる。正式には次年度の祭までだんじりを曳き出すことはないため、名残をおしむ地区の人たちがだんじり小屋の前に集まり、小屋入れのパフォーマンスを楽しむ⁽¹¹⁾。

(4) 曳き手の役割

ここでは、曳行の際に直接だんじりに触れ、行列に参加している者たちを「曳き手」と呼ぶことにする。

まず、曳き手をだんじりに対する位置で大別すると、だんじり前方で綱に関わる者、だんじりの後部に位置し、「後ろテコ」と呼ばれる舵に関わる者、だんじり本体に乗り込み囃子や曳行指示に関わる者の3種に分けることができる。なお、曳

き手の役割や並び位置に関しては地区によって若干違いがあるが、ここでは一般的な形をあげておく。

綱を持つ曳き手は青年団員の「綱先責任者」を先頭に小学生・中学生・女性、青年団員と続き、最後方の一群は「綱元」と呼ばれる。「前テコ」やブレーキの操作など、だんじり曳行において重要な役割を担う一団である。

綱とだんじりとの結節点には「綱長」という経験豊富な団員が位置するのが普通である。周囲にはうちわを持ち、かけ声や綱の曳き手への指揮を役目とする「追い役」が併走する。疲れ切った団員や子どもたちに「活」を入れるのも彼らの役目である。

だんじり後部に位置するのは、「後ろテコ」を担当する者たちであるが、これは青年団OBが担当する。「後ろテコ」はだんじりの部位をさす名称であるが、同時にそれを操作する人たちのこともさす。この「後ろテコ」はだんじり曳行の最も重要な役割である舵取りが役目で、熟練が要求される。この集団は、伝統的には「拾伍人組」とよばれていたが、現在は別の組織名が使われるのが普通である⁽¹²⁾。だんじり本体には「囃子手」が、屋根の上には「大工方」が位置する。「囃子手」はだんじり内部で曳行の際の音楽を演奏する。楽器は笛、太鼓、鉦で、その役割の性質上、メンバーはある程度固定されるが、これも青年団員である。基本的には希望者が練習してこの役目を受け持つことになっている。

また、「大工方」は屋根の上で威勢良く飛び跳

(11) たとえば、上地区では途中まで小屋に入ったところで何度も曳きもどすし、野田地区ではわざと失敗して納車を繰り返す。2005年度の祭礼では、警察の指導強化で納車の際のパフォーマンスが制限され、「あっさりめに」納車するところが多かった。

なお、予定表では22時に納車ということになっているが、実際に納車が終わる頃には12時をまわっている。これも12時には終わる、という警察との「暗黙の了解」の上でのことである。

(12) 各地区ごとに名前が異なり、青年団と同じく、祭運営上の独立した組織となっている。一般に「〇〇会」という名称がもちいられる。曳行の場だけでなく、若年層と指導組織の間を仲介する地域組織としても重要な役割をはたす。

ね、かけ声をかけ、踊ることが役目であるかのように思われがちであるが、彼らの役目は、曳き手全体に曳行の指示を出すことである。特に「後ろテコ」からは前方が見えないため、コース変更や「やりまわし」の際には遠くを見通す「大工方」の指示が欠かせない

だんじり本体の前面、側面には主だった役職者が交代で立つ。この位置にたつことは、だんじり曳行に貢献があったことの証であると同時に、地域の顔役であることの証でもある。

だんじり曳行時には、子どもたちや子供会の母親たち、カメラを手にした人びとなどが後ろから走って追いかけているのがよくある風景である。人によっては自転車にのっていることもある。直接の曳き手ではないし、正規の曳き手でもないが、曳行時にはかならず行列に加わっているため、彼らも一種の構成員といってもいいかもしれない。

(5) その他曳行の風俗

ここでは、曳行にかかわるさまざまな風俗についてまとめておく。

まず、服装についてであるが、現在ではどの地区もはっぴに地下足袋、はちまき、首からお守りをさげている。現在のような服装になったのは、連合曳きが始まってからのことであるらしく、それ以前は浴衣姿であった。写真13は野田区のお年寄りが所有されていたものであるが、昔は浴衣姿であったという話自体は各地区で聞かれた。連合曳きがはじまると、各地区の特色をだすために、はっぴに地区名をいれ、着用するようになったのだ。

はっぴの着用は岸和田のスタイルでもあり、連合曳きが開始されたころには、すでに岸和田スタイルがだんじり祭のフォーマットとして広まりつつあったことをしめしている。すくなくとも鳳ではこの時期に伝統の「地車囃子」や「曳き唄」、「かけ声」が岸和田スタイルに変化しはじめており、現在では囃子やかけ声はほぼ岸和田のもの

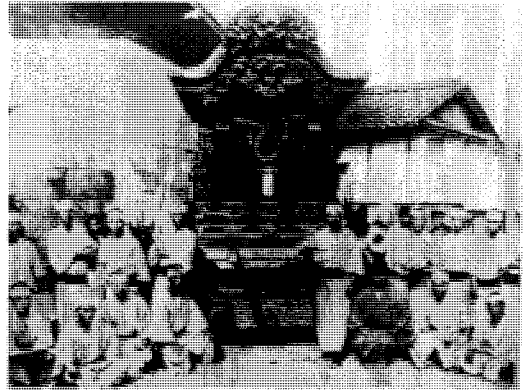


写真13：浴衣姿で曳く戦前のだんじり
(昭和初期、野田地区)



写真14：大鳥地区のはっぴを着た編み込み
スタイルの女性（大鳥地区）

かわらなくなっている。「宮入」時には鳥居をくぐった瞬間に鳳独自の囃子やかけ声に変わるが、逆にいえば、それ以外の時にはほぼ岸和田型の囃子やかけ声を使っているということでもある。

また、現在では、少年団、青年団の女の子たちのヘアスタイルなども岸和田の影響を強く受けている。これは別に岸和田スタイルなるものがあるわけではない。彼女たちは、一足先に行われる岸和田だんじり祭を見に行き、気に入ったものがあれば同じ美容室にいった「編み込み」などのヘアスタイルにするのである（写真14）。

その他だんじり祭に関わるものとしては、地区毎に制作される「だんじりグッズ」がある。代表的なものはうちわやタオルだが、携帯ストラップ

などを用意している地区もある。これらは関係者に配布されるほか、販売もされている。

また、ウイングスでは祭期間中ははっぴや地下足袋などを大量に用意し、大社前の露店では、だんじりの風船模型なども売られている。

5. 祭礼運営組織

もともと鳳地区全体をまとめるだんじり組織は存在せず、昭和にはいつてからも旧村地区をベースとした組織がそれぞれの地区のだんじり曳行を運営していた。高度成長期以前の各地区の運営組織の詳細については不明な点が多いが、当然ながら、現在の組織よりも近世的な特徴が色濃く残っていた。たとえば、鳳地区のだんじり組織では現在ほとんど見ることでできない「講」なども一定の役割を果たしていたようである⁽¹³⁾。

現在の「鳳地車連合会」（別名「連合会」）は今から35年ほど前に「連合曳き」を始めたことを契機に、いわば既存の地区組織の統括・調整組織として立ち上げたものである。そのため、各町のだんじり運営組織は以前の運営組織の名残を残していることがあり、組織編成や役割の分担にも微妙な差異が認められる。とはいえ、大枠では標準的な組織構成とでも呼べるパターンが存在する。「連合会」、地区の運営運営組織の概要をまとめ、その後、各下部組織について説明する

(1) 鳳地車連合会

美波比神社の氏子地域を超えた範囲で行われるのが鳳だんじり祭の特徴の一つである。この形式

の成立と継続は、現在の行政区域とはべつの地域性が存在していたこと、またそれが今も継続していること示唆している。これらは「連合会」の経緯や運営を通じて明らかになるはずである。

もともと、各地区のだんじりがそれぞれの地域の氏神神社の祭礼の際に曳航されていたことは間違いない。しかし、脚注4で述べたように、明治期に旧六ヶ村の氏神神社が大鳥大社内に合祀されると、旧六ヶ村は美波比神社という同じ神社の氏子ということになり、それぞれの地区が旧六ヶ村内でだんじりの曳行を行ってきたのである。もちろん、相互乗り入れ自体はそれ以前からあった可能性が高い。いずれにせよ明治期以降、同じ神社の氏子として旧大鳥村内を各地区のだんじりが曳行していたのである。

ところが、歴史的経緯は明確ではないが、鳳には以前から近隣地区のだんじりも乗り入れてきており、それが今日の連合曳きの起源となっている。鳳地区住民、特に若い人の中には、連合曳き以前には鳳以外の地区のだんじりは乗り入れていなかったとの認識を持っている人も多いが、それは「連合曳き」という現在の形での乗り入れではなかったというだけで、周辺地区のだんじりは鳳でも走っていたのである。実際、戦前の様子を直接・間接に知る富木地区のお年寄りからは、上や石橋も含めた鳳での曳行の逸話もいくつか聞けた⁽¹⁴⁾。戦前に信太のだんじりと長承寺の警察（堺南警察署。現在は移転）の前で喧嘩したという話もあり、現在連合曳きに参加している地区以外のだんじりも乗り入れていたようである⁽¹⁵⁾。

さて、連合曳きがはじまる以前から、旧六村で

(13) 地域の古老のインタビューでは、これは現在の組織でいえば各地区の「保存会」等に姿を変えたからではないかという指摘もあったが、これを裏付けるデータは収集できなかった。しかし、「お花代」（寄付）の集金や弁当の世話など、「講」的な役割を担っていることは確かであり、今後さらに調査する必要がある。

(14) 昭和3年に警察官を巻き込んだ事故も、昭和33年に新聞記者と「喧嘩」でけがをさせたのも、鳳を曳航しているときのことであったという。それ以外にも、旧六ヶ村とそれ以外の地区の関係性がよく分かる貴重な話がいくつか聞けたが、詳細は別稿に譲る。

(15) 信太の他にも、草部、原田、新家、下村などの地域が乗り入れていたという。

は曳行に関して簡単な打ち合わせを行っていたが、コースなどを巡るトラブルが起きることも多かったようだ。

このような状況を改善しようと旧六ヶ村と上地区とで立ち上げたのが、各地区の責任者が集まる「鳳地車運営委員会」（現「連合会」）⁽¹⁶⁾で、曳行のコースや時間を相談し、各地区の曳行をとりまとめていた。ただ、この組織の立ち上げの時期や経緯に関する詳細は不明である。インタビューでかろうじて発足が1960年前後であることと経緯のあらましかけはわかったが、これらを裏付けるドキュメントデータは得られなかった。

その後、富木、石橋、浜寺元町が参加し、現在の10地区の形となった⁽¹⁷⁾。富木や石橋の参加はとくに問題がなかったが、浜寺元町の参加に関しては反対意見もあったという。というのも、9地区での連合曳きの形ができあがって20年近くたってからの参加であり、曳行スケジュールの調整に「連合会」内で不満がでたのである。具体的には、各地区の曳行時間が短くなること、JRの踏み切り通過のタイムスケジュールの組み直しがやっかいであることなどが挙げられていた。しかし、結果的には連合会への加入が認められ、現在の10地区での曳行となったのである。

組織が現在の「連合会」の形になったのは、1970年（昭和45年）頃のことである。1960年前後に「運営委員会」を立ち上げた北王子地区の中田三代次氏はその後10年間会長を務めたが、当時は連合曳きとはいえ、単に連なって曳航するのみだったという。その後、会長が持ち回りとなったのを境に現在の「連合会」へと組織替えがおこなわれた。この時期から「連合会」はコースやス

ケジュールの調整・決定の他に、警察や運輸鉄道各社、市との折衝、祭当日の警備など、現在とほぼ同じ組織と活動をもつようになったのである。

「連合会」は各地区の代表者で構成員され、会長・副会長・理事（各地区から4名）・顧問の4つの役職がある。

会長は旧六ヶ村と上地区の代表のみが担当し、富木・石橋・浜寺元町は担当しないことになっている。連合会に参加してから年数が浅いことがその理由であるが、どの時点でこの3地区が会長職を担当するようになるのかは不明である。会長は概ね30代後半から40代前半の者が勤める。就任と同時に次期会長も決定され、この時期会長が自動的に副会長となる。任期はともに1年である。

顧問には旧六ヶ村と上地区の会長経験者および富木の代表者が就任する。会長を退くと同時に就任し、自分の地区に再び会長職がまわってくるまで継続するため、任期は7年である。会長職がまわってこない富木が顧問に加わるのは、警察の道路使用許可の問題があるからである。富木地区は高石市であるので、警察の許可をとる際、管轄がちがうのである。

（2）地区組織

① 保存会・運営委員会

各地区のだんじり運営組織の元締めにあたるが、地区の下部組織（青年団、「後ろテコ」）の構成員が兼任している場合もある。地区によっては、若頭などの伝統的な役職名が残っているところもある。

準備段階では地区の意見のとりまとめ事案の審議・決定、物品の管理・手配、会計などを、祭の

(16) 現在でも正式名称は「鳳地車運営委員会」であるが、一般に「連合（会）」と呼ばれることが多いため、本稿では「連合会」の名称を優先して使っている。

(17) 石橋は1983年（昭和58年）に、浜寺元町は2000年（平成12年）に参加している。富木参加の正確な参加年次は不明。上と富木はかなり古くから鳳で曳行していたということだが、取石村が市制の変更で1953年（昭和28年）に高石市に編成されたため、連合会には参加していなかった。もっとも、連合会設立後すぐに連合曳きに参加していたようで、石橋よりも早かったことは確かである。

当日は「御花」の受付・管理や交通整理などを担当しており、まさに裏方の中心である。また、豊富な経験を生かして、他の組織のフォローにもあたる。

この組織の特徴として、構成員が自治会役員とほぼ重なっていることが挙げられる。行政の末端組織としての自治会と祭礼組織である保存会・運営委員会はその目的も組織原理も異なるものであるが、実際には「地域組織」として混在しているのである。実際、墓地の管理など自治会が担当するはずの役割を保存会が担当している地区などもある。本来、村落共同体の地域組織は、相互扶助的な側面、行政体としての側面、祭祀組織としての側面を併せ持つものであるから、伝統的な村落組織の特徴を残しているといってもよい。

しかしながら、祭祀組織には属さない自治会員も増えてきており、現在ではだんじり運営組織の祭祀組織への特化が試みられている地区もある。

② 後ろテコ

曳行時に「後ろテコ」を担当し、青年団OBが所属する。地区によっては、大工方もこの組織に属する。年齢は20代後半くらいからであるが、明確な上限はない。地区毎に名称がことになっており⁽¹⁸⁾、伝統的な組織名も多く見られる。

「曳行責任者」という、その名の通り、曳行の最高責任者はこの「後ろテコ」から選出するのが普通である⁽¹⁹⁾。曳行責任者は連合会の会議にも出席するため、鳳の指導的立場にある人たちと、若い末端の人たちとの中継・仲介役もはたす。だんじりの曳行だけでなく、地域生活の中堅でもあるのだ。

③ 青年団

一般には自治会組織であるが、鳳の場合、祭礼組織としての色合いがかなり強い。曳行の主力部隊であり、曳き手や囃子（「鳴り物」）、役員は追役などを担当する。だんじりの維持管理も彼らの役目であり、準備段階・祭礼当日を通じて、つねにだんじりの一番近くで仕事をする人たちである。祭以外には、夏祭り（盆踊り）、墓掃除、年末の夜警、花見、地区対抗ソフトボール大会などを行っている。

どの青年団も、「〇〇青年団」（〇〇は地区名）という名称で、高校生から20代後半くらいまでが所属するが、年齢構成は団によって若干ことなる。

この組織の最大の特徴は、現住所に関係なく所属する青年団を選ぶことができるという点である。いつごろからそうになったのか、これも明確ではない。理由はとくに必要なく、だんじりがかっこいいとか、青年団の人たちが好きだとか、個人的な好みにしたがって青年団を選択することができる。

興味深いのは、友達や先輩といった仲の良い知り合いのいる団、もしくは仲の良い知り合いが所属する予定の団に集団で所属する傾向があることである。つまり、青年団はフォーマルな地域組織であるとともに、インフォーマルなピア・グループの側面も併せ持っているのである。その結果、地域の人口構成に関係なく、青年団の内部で年齢（＝学年）ごとにかなり人数のムラが生じることがある。青年団の役職経験者が後々、地区の有力な役職に就くことが多いため、地区全体の組織編成を分析する際にも重要なファクターである。

また、野田地区では青年団に女性は参加できない⁽²⁰⁾。他の青年団でも高校卒業と同時に青年団

(18) 大鳥：拾五人組、野田：千成壺心会、新在家：翠雲会、北王子：貳拾五人組、野代：野城会、長承寺：菊水会、上：拾五人組、石橋：聚済会、富木：拾五人組、浜寺元町：三四会

(19) 地域によって若干違いがあるが、いずれにせよ、「後ろテコ」の前後の時期に曳行責任者を経験する。曳行責任者は、以前は「支部長」とも呼ばれていた。

(20) 野田青年団では、2005年の祭の後、一時女性団員を受け入れることになったが、その計画は既に頓挫している。また、上青年団では、女性は青年団への加入はできるが、だんじりを曳くことはできない。

を辞めるのが普通である⁽²¹⁾。これらも青年団が基本的には祭礼組織であることの一証左であろう。

④ 子供会・少年団

子供会は小学校単位で構成される地区組織であり、祭礼時には各地区で曳き手として参加する。小学生で構成されているが、富木でのみ、中学2年生まで所属する。曳行の際には危険の少ない綱先を担当する。母親が付き添っている場合も多い。

少年団はやはり曳行の際に曳き手として参加するだけであるが、こちらは中学生で構成されている。子供会と青年団の間に年齢的な空白があったこと、祭の最中のケガなどで地区が加入している保険を適用するには地区組織に加入していなければならないことなどから近年組織された⁽²²⁾。青年団の組織率向上も目的としている。以前は中学生も青年団と行動をとともにすることが多かったが、酒やタバコといった「大人の嗜み」から遠ざけておきたいという保護者の側からの要望もあったという。

祭全体の運営からみれば、保護者による清掃などの活動もこれらの組織の役割であると考えてよいだろう。

⑤ 婦人会

いわゆる自治会の婦人会である。パレード後の路上や本部近辺の清掃、飲食物の準備⁽²³⁾などをおこなう。婦人会が存在するのは、新在家・北王子・長承寺・上・石橋・浜寺元町で、それ以外の地区では清掃などの仕事は子供会・青年団の保護者やボランティアの手による。富木には婦人会はないが、子供会のOG・保護者で構成される「水

無月会」がある。

旧六ヶ村で婦人会があまり組織されていないのも、地域組織がだんじり組織をベースにしていることに関連があるのかもしれない。ただし、人口増加が婦人会の立ち上げに関連している可能性も高いので、そのあたりも考慮にいった調査と分析が必要であろう。

6. 抽出された論点と今後の課題

最後に、これまでの調査でみいだされた論点を整理し、今後の調査研究の展開の方向性について論じたい。

① 鳳だんじりとだんじりの「岸和田化」

4節で「岸和田志向」という言葉を使ったが、これは鳳独自の問題というわけではなく、「だんじり祭」と呼ばれる祭全般にかかわる問題である。他の祭については紙幅もないし、十分な調査ができていないわけでもないの、ここでは具体的な例として鳳の祭のスタイルを見て行きながら、だんじり祭の岸和田化⁽²⁴⁾について考えてみたい。

そもそも、ここでいう「岸和田志向」「岸和田化」とは、地車本体・曳行のスタイルなど祭全体にかかわるものである。勇み足を恐れずにいえば、近畿圏を中心とした「だんじり祭」と呼ばれる曳きだんじりは、すべて岸和田の影響を強く受けつつある。特に近年再開されたタイプのだんじり祭は、伝統の復古というよりも、岸和田だんじりをモデルに新規に開始したと考えた方が適切である場合も多い。鳳のように、独自の祭を続けてきたところでさえ大きな影響を受けているのであるか

(21) 大鳥地区では青年団OGが「小鳥会」という組織を結成して、「青年団のお手伝い」をしている。

(22) 少年団があるのは、野田、新在家、北王子、野代、富木、浜寺元町。新在家では「JC」という名称である。

野田の少年団は青年団の下部組織で、富木の少年団は子供会の下部組織である。

(23) 地区によっては炊き出しなどはおこなわず、弁当を業者に外注する。祭礼時の代表的な料理としては、^{かんたき}関東煮（おでん）などがある。

(24) 鳳でのインタビューでは、「岸和田ナイズ」という言葉も聞かれた。

表3：新調・購入だんじりの型の変遷

地区	型	年
石橋	上地車	1890年（明治23年）
大鳥	下地車	1931年（昭和6年）
野田	上地車	1932年（昭和7年）○
長承寺	下地車	1969（昭和48年） 岸和田市河合町から購入。 制作は明治2,30年代
野代	折衷型	1976年（昭和51年）
新在家	折衷型	1977年（昭和52年）
濱寺元町	折衷型	1988年（昭和63年）○
北王子	下地車	1997年（平成9年）○
上	下地車	1998年（平成10年）○
富木	下地車	2000年（平成12年）○

ら、後発組に対する影響は絶大である。

さて、4節では、鳳だんじりまつりも地車本体や服装、かけ声、囃子など、さまざまな面で岸和田の影響を受けていると述べたが、ここで地車本体について、もうすこしくわしく分析してみよう。

各地区のだんじりの制作年と型を一覧にし、年代順に並べたのが表3である⁽²⁵⁾。大鳥の下地車新調だけが例外的に古い⁽²⁶⁾が、あとは上地車→折衷型→下地車という流れになっており、しかも年代がかなりはっきりと分かれていることがわかる。つまり、連合曳きが始まった1970年前後を境に折衷型となり、90年代後半になると下地車になっているのである。

すでに述べたように、下地車の需要は「やりまわし」という曳行スタイルによるものであり、だんじりそのもののトレンドというより、曳行スタイルのトレンドの表出と考えた方がよい。要するに、服装ややりまわし、囃子やかけ声といった曳

行スタイルが岸和田の影響を強く受けているのである。

この強大な影響力の源は、やはり岸和田だんじりがマス・メディアによって全国的に有名になったこと、その結果、観客もふえ、行政等のバックアップも得られ、しかもそうして盛大になった祭をさらにマスメディアが報じるという、「大成功」にあると思われる。そもそも、地域の人々が楽しむことが主眼の祭には優劣も勝敗もない。しかし、観客の動員数や補助金の額、テレビでの放送回数など、外部の視線や論理がはいりこめば、それらはたちまち、あたかも祭に優劣や勝敗があるかのような錯覚を呼び起こす。「視聴率」や「経済効果」など、あってなきがごとき数字さえも「祭の評価」となりうるのである。

さらに重要なのは、原因がなんであれ観客が多いこと、これにつきる。祭で重要なのは、「踊る阿呆と見る阿呆」の双方である。祭をイベントとして考えた場合、観客の有無は参加者の満足度に大きな差をあたえる。実際、鳳でコースやスケジュールの調整に腐心したり、旧六ヶ村以外の地区が鳳の祭に参加したりするのも、「見物人が多い方が楽しい」からなのである。

こうしてみると、岸和田は鳳のモデル＝ライバル〔ジラルル、1971〕であることが分かる。あらゆる意味で最高のだんじり祭（地元の人たちが満足するだけでなく、テレビに出たり、観客がおしよせたりする）をおこなうことを祭の目的と考えれば、鳳にとって岸和田はその目的を達成したモデルであり、また同じ目標を争うライバルでもある。しかし、今ここで目標となっているのは、「岸和田型の成功をおさめただんじり祭」であって、それを目標とするかぎり「岸和田のようにす

(25) だんじりの制作年は、「新調入魂式」（制作開始時）と「完成入魂式」（完成時）とで示されることが多い。表2では、基本的に「新調入魂式」の年を挙げ、その後に○印をつけている。○がないものは、詳細が不明なものである。ただし、「新調入魂式」と「完成入魂式」の間隔は1, 2年程度であるので、だんじり新調のおおまかな傾向は把握できるはずである。

(26) 大鳥の下地車は、堺で最初の下地車である。

る」しかない。つまり、ジラールが「欲望の三角形」で述べているような、一種のジレンマに陥りかねない。だんじり祭のシンボルとしての岸和田だんじりは、原理的に岸和田にしか実現できないのである。いいかえれば、「岸和田のようなだんじり祭」を岸和田と競っても、永遠に追いつく事はできないのである。何らかの形で競いあうのであれば、鳳は別のモデルを作らざるを得ない。

鳳の年配者からよく聞かれる不満に、鳳独自の伝統や風習が失われつつあるというものがある。この不満には、鳳のだんじり祭が抱えるジレンマがよく表れているともいえよう。文化とは変化するものだし、古きをよしとするだけではいずれ継承は途絶えてしまう。さりとて、換骨奪胎が行き過ぎれば、これもまた伝統の継承とは言い難いだろうし、新規創造はそれに輪をかけてむずかしいことはいうまでもない。

ただ、こうした問題は、鳳だんじり祭に固有のものではない。全国的にも、伝統的な祭が標準化・画一化されていく傾向があり、そうした意味では鳳だんじり祭は、その1ケースだともいえる。マス・メディアに登場する一部の祭が強力なモデルとなったり、「平等で開かれた祭」であることが要請されたり、経済効果や安全性などが祭の運営上重視されるようになったり、変化の要因はさまざまであるが、これらいわば近代的な価値基準と伝統的祭礼がもつ論理との齟齬がジレンマとなっているのである。また、そうした近代的な価値基準は、行政による規制という「外圧」の形をとる場合もある⁽²⁷⁾。

いずれにせよ、共同体の内部・外部で様々な価値規範がせめぎ合い、流動的な状態にあるのが今の鳳だんじり祭の状況だといえよう。こうしたなか、

鳳の祭がどのように変化していくのか、他の地域のだんじり祭との比較も含めて、今後、調査・検討していきたい。

② 運営組織の変容

これまでの記述であきらかなように、鳳の祭礼組織と自治会組織は未分化の状態にあり、現在、組織の再編成の動きがあらわれている。祭礼組織の構成員と自治会役員とが交錯しており、婦人会の欠如など自治会組織がだんじり組織をベースに構成されたと思われる点も散見される。また、だんじり組織の人選が自治会組織にも共通しているということは、地域内のキャリアアップがだんじりへの貢献に左右されるということでもある。われわれの調査班では、適切な言葉が思いつかないのと冗談半分とでこれを「だんじりキャリア」と呼んでいたが、あながち的はずれな呼び方ではないだろうとも思う。

現在のところ、具体的に問題化している事例があるわけではないが、とくに人口が増加し、新規住民が多い地区では、自治会が機能不全に陥る可能性もある。かといって、「公平で民主的なだけの自治会」では、だんじりの曳行・祭の運営にさまざまな支障が生ずる⁽²⁸⁾。

こうしたなか、地区によっては意識的に組織の近代化をはかろうとしているところもある。連合会会長経験者の一人は、① 行政の下部組織的役割を自治会が、文化事業（要するにだんじり祭）を「区」が受け持ち、その分担・分離を明確化し、「民主化」をすすめること、② 役員が決める上意下達方式から、事案協議の上下移動（下達と吸い上げ、議論の重視）を活発化するよう組織を改編すること、以上の2点を地区のここ数年の課題と

(27) 一方で、そうしたしがらみのない新しい祭やイベントが人気を博すことも珍しくない。「本家」を離れ、全国各地で開催されるようになった「阿波踊り」「よさこい祭」などが代表的な事例である。これらは地域おこしなどの名目で頭初から行政が深く関与していることが多い。

(28) じっさい、短期間で交代してしまう会長では祭の運営はできないという声も多数聞かれた。伝統的な祭では暴力団対策なども含め、運営上の「めんどろな課題」が多いのである。

してかかげ、やっと目鼻がついてきたところであるという。

もちろん、この二つの組織を明確に分離し、分業体制を組むことには一定の意義があるだろう。しかし、分業が分裂になってしまえば祭の運営能力は激減する。下手すれば、新住民の自治会と旧住民のだんじり組織という形で、地域組織が空中分解する恐れもあるのだ。役割を分離しつつ、連携のとれた組織であることが必要なのである。

改革の必要性と安易な分化の危険性は背中合わせである。今後、どのように改革・変化がすすんでいくのか、さらに調査を継続する必要がある。

これら①②の問題は、もちろんすぐに結論がでるようなものではないし、なによりデータも分析もまだまだ不十分である。さらなる調査研究を誓って筆を置きたい。

資料

資料1：インタビュー項目

以下の項目を直接書き込み可能なシートの形でインタビューに配布、インフォーマント毎に質問項目を選択して使用。

1. 属性

名前・年齢・性別・職業・家族構成・現住所・出生地・居住年数・だんじり祭の参加経験

2. 地域組織について

地域のだんじり組織の構成・インフォーマント

が関与している組織・組織構成の概要（歴史と変化も）・構成員の属性（歴史と変化も）・資格、地域（転入転出者の問題も）・人数・組織率（歴史と変化も）・目的・活動内容（歴史と変化も）・だんじり祭関係とそれ以外の活動・意志決定方法・参加理由と時期・他団体との関連（歴史と変化も）・組織や参加者の意識の変化や問題点・寄付等お金のこと

3. だんじり祭について

曳行スケジュール・だんじりの歴史・だんじりの保存・だんじり祭の伝統と改革についての意識・だんじりの観光資源化についての意識

4. 女性とだんじり祭の関わりについて

女性の役割：準備・当日・「婦人会」について（なければ集まり等）・女性がだんじり祭に関わることにについてどう思うか・どの程度の関わりが望ましいと思うか

5. 子供とだんじり祭の関わりについて

参加経験（親と子双方）・女子の場合の関わり方・だんじり祭への参加に関して、学校はどのように／どの程度、協力／干渉するのか・だんじり祭に関して、学校としての取り組み、もしくは学校対象の地域の取り組み等はあるのか

6. だんじりに関わらない人たちについて

属性（世代、地域等）、特性、理由・だんじりに全く関わらない地域住民をどう考えているか・観客としてのみの関わりをどう考えるか・今後、関わるつもりはあるか／関わるよう働きかけるか

資料2：定点観測シート（記入例）

記入項目は以下のとおり。観測者から提出されたエクセルファイルから一部をそのまま転載した。定点にて朝 6:00 から夜の 12 時まで 20 分おきに記入。それと同時にカメラやビデオでの撮影も行なっている。なお、転載にあたって、記録者の名前は伏せているが、内容の改変はしていない。

資料 2

通し番号	7004-2	7005-1	7005-2
記入者	〇〇	〇〇	〇〇
日付	10月9日	10月9日	10月9日
場所	トヨペット前	トヨペット前	トヨペット前
時間	12:40	13:00	13:20
地車	なし。	なし。	なし。もうすぐ始まりそう？
周囲の状況	日傘さしてる人もちらほら。	みんな暑いって言ってる。うちわ片手に・・・	同じ。
観客の様子	歩道の半分ほどを占めるようになってきた。 王将前人いっぱい！！	3分前に「パレード遅れる」という放送があってから、少しざわつき始めた。 いつの間にか自分たちのうしろは3重になってる・・・	物療前でロープを張り出したため、人が殺到している
関係者の様子	やぐらが車道に出てきた。 富木・石橋の人たち（女性）がほうきを持ってきている	ウィングス前に連青メンバーが待機している	やぐらが道の真ん中に置かれる（カメラ設置のため）。 石橋子ども会の母親がほうきを持って待機。（こちら側） 大鳥名誉会長登場
交通状況	少し少なくなっている	少なくなってる。けど、まだヨーカドー前で規制がかかっておらず、どんどん来る。	車なくなった。
警備状況	ガードマンが10mごとに配置されてる（こちら側だけ）。物療前・王将前にも配置。	歩道前は5～10m配置。物療前は10人ほど。（ウィングス前は見えない）	警察官が道の真ん中に出てくる。 13号線規制しかけ。
その他			赤い紙テープみたいなのを道にはった。

参 考 文 献

- 芦田徹郎, 2001,『祭と宗教の現代社会学』, 世界思想社
- 岩根淳, 1998,『泉州地車往来』, シメノ印刷工業.
- ホブズボウム, E., 1992, 前川啓治他訳,『創られた伝統』, 紀伊國屋書店
- 大阪府神道青年会, 1971,『大阪府神社名鑑』, 大阪府神道青年会.
- 大阪府神社庁, 1986,『大阪府神社史資料(復刻)』, 大阪府神社庁.
- 大塚民俗学会編, 1997,『日本民俗学辞典』, 弘文堂.
- 角川歴彦, 2000,『堺の歴史』, 角川書店
- 北濱喜一, 2000,『地車(だんじり)とは日本文化そのもの』『堺・泉州 第8号』, 堺泉州出版会
- 堺市, 2004,『堺市の概要 平成16年度』.
- , 2005,『堺市の概要 平成17年度』
- 堺市教育委員会, 1996,『改訂版 ハンドブック 堺の文化財補遺』
- 堺市経済局商工部商工振興課, 2002,『平成11年商業統計分析事業報告書』.
- 堺市経済局商工部商工課, 1997,『堺市小売商業メッシュ別指標マップ』
- 堺市市長公室企画部, 2001,『堺市総合計画 さかい21世紀・未来デザイン』.
- , 2003,『国勢調査で見る堺 平成12年度国勢調査結果』.
- , 2004,『堺市統計書(平成15年度版)』.
- 堺市市長公室広報課, 2004,『さかい興味津津』
- 「堺・泉州」出版会, 1997,『堺・泉州 第三号<特集>だんじり』.
- ▽野綾子編, 1994,『ザ・だんじり '94 躍動!! 摂河泉 神戸/芦屋/尼崎/大阪/東大阪/富田林/羽曳野/河南/千早赤坂/大阪狭山/河内長野』だん吉友の会.
- ジラル, R., 1971, 古田幸男訳,『欲望の現象学』, 法政大学出版局
- だん吉友の会, 1994,『ザ・だんじり '94』, だん吉友の会.
- , 1986,『ザ・だんじり '86 躍動!! 泉州路』, だん吉友の会.
- 松本多加三, 2000a,「堺泉州の「祭り」論」『堺・泉州 第8号』, 堺泉州出版会.
- , 2000b,「堺のだんじりの歴史と現在」『だんじり堺』, 堺泉州出版会
- 別所やそじ・尼見清市, 1976,『むかしの堺』, 堺児童文化振興会.
- 松平誠, 1980,『祭の社会学』, 講談社.
- , 1990,『都市祝祭の社会学』, 有斐閣.

- 森田三郎, 1990,『祭りの文化人類学』, 世界思想社.
- 米山俊直, 1986,『都市と祭りの人類学』, 河出書房新社.
- , 1979,『天神祭』, 中央公論社.

参 考 資 料

- 大阪21世紀協会,『大阪 秋のまつり 2004 10/1-11/30』
- 鳳校区自治連合会, 鳳校区福祉委員会, 1997~2005,『広報おとり 1-33号』
- 大鳥大社,『大鳥大社由緒略記(通称大鳥さん)』
- 鳳地車運営委員会企画広報部, 2004,『曳行まっぷ 2004』
- , 2004,『おとりだんじり祭 平成16年度』
- 鳳地車連合会, 2003,『平成15年度祭礼 地車曳行規約』
- , 2003,『鳳地区連合会 平成15年度祭礼 地車曳行規約』
- , 2005,『鳳地車祭運営組織図』
- , 2005,『平成17年度 鳳地車運営委員会 責任者名簿』
- , 2004,『準備委員会組織図, 会則, 役割分担表』
- , 2001,『南町地車修理寄付御礼・入魂式招待状等文書』
- (作成年不明),『地車各部名称一覧』
- 堺市イベント情報誌刊行委員会,『さかいイベントガイド Vol.55』
- 堺市広報課, 2002-3,『堺市支所広報 堺・中・東・西・南・北』
- 2000,『堺 1/25,000』(地図), 国土地理院
- 2006年,『マップルリング関西 大阪・神戸・京都』, 昭文社

各地区の資料

- <大鳥>
- 大鳥区青年団 野田区青年団, (作成年不明),『だんじり祭りについて』
- (作成年不明),『無題(大鳥だんじり祭りの歴史と地車の説明)』
- <野田>
- 2001,『野田地区地車修理寄付金お願い』
- 2001,『野田地区地車の各部名称』
- 2002,『野田地区地車修理寄付御礼・入魂式招待状等文書』
- 2004,『野田地区試験曳きコース』
- 2004,『野田地車保存会会則案』
- 2004,『平成16年度 野田地区地車曳行コース予定表』
- 2005,『野田地区 地車関係 組織図』
- (作成年不明),『野田区役員会会則(案)』
- (作成年不明),『野田の地車彫り物』
- 野田地区地車運営保存委員会, 荳心会, 青年團, 2001,

『野田地車の由来と大修理のお願い』

——, 2001, 『秋祭り及び地車修理のお知らせ』

野田区地車修理委員会, 2001, 『野田区地車だより 01 年 10 月号』

——, 2001, 『野田区地車だより 01 年 12 月』

<上>

2001, 『上地車修理寄付御礼・入魂式招待状等文書』

<富木>

2001, 『富木地車修理寄付御礼・入魂式招待状等文書』

参考 HP

「堺市 HP」

http://www.city.sakai.osaka.jp/city/info/_chosa/index.html

「高石市 HP」, <http://www.city.takaishi.osaka.jp/>

映像資料

なんでもやトモちゃん, 2002, 「2002 鳳の祭」(VHS)

なんでもやトモちゃん, 2003, 「2003 鳳の祭」(VHS)

なんでもやトモちゃん, 2004, 「2004 鳳の祭」(VHS)

住野三樹, 2003, 「2003 鳳だんじり No. 1-5」DVD

——, 2004, 「2004 鳳だんじり No. 1-5」DVD

* 住野氏の DVD は, 野田青年団員に配布されるプライベートビデオである。ご好意で提供していただいた。

* 参考資料の掲載は, 紙幅の都合で若干省いている。

付記: 本研究は, 04 年度大阪樟蔭女子大学学内特別研究助成費の交付を受けた。

Some observations on *the Otori Danjiri festival*: for the study of the local community and traditional organization of religious rite

Osaka Shoin Women's University
Ryo NONAKA

Summary

The purpose of this paper is to make a database of *the Otori Danjiri festival*. The aim and end of our study is to consider modernization of the local community and traditional organization of the religious rite. Since there have been no studies that have ever tried to make clear the outlines of the festival, in this paper, we will make clear the outlines of *Otori* area and *the Otori Danjiri festival*. In addition to this, we will also try to show some points at issue.

First of all, we will describe the details of this area and the festival, and we will make database files item by item. Secondary, we will examine and consider the organization of the religious rite, the traditional community and the modern political organizations (*Jichikai*) of *Otori* area. So far, we have seen that these organizations don't divide, and that they are inseparable. And also we will detect that the festival has been changing over to *the Kishiwada Danjiri* style.

Keywords: *Danjiri*, festival, *Otori*, organization of religious rite, *Jichikai*